

私大の入試方法は大学ごとに千差万別 相性の良い大学を選んで合格を引き寄せる

国公立大学と違い、入試日程さえ合えば何校でも受験できるのが私立大学の医学部一般選抜です。しかし、医学部自体の数が少なく、限られた募集枠に受験生が殺到するため、例年平均13倍前後と他学部にはない高倍率となっています。私立大学の入試方法は多様。その中で自分に合った入試方法をとるのはどこか。そこを考えるだけで合格可能性は大きく違ってきます。



2024年度の志願者は10万人の大体に 志願倍率は36.9倍、実質倍率は13.7倍

少子化の影響で大学志願者が減少する中、医学部は安定的に高い人気を維持しており、特に私立大学では志願者の増加が目立っています。一般選抜（共通テスト利用選抜含む）における私立大学医学部の志願者は、2023年度は前年度より約4300人増加しましたが、2024年度は前年度を1万人近く上回り、10万人の大体を超えました。その結果、一般選抜入試・共通テスト利用入試での志願倍率は36.9倍と、他学部では例を見ない高さを示しました。私立大学を専願する受験生の場合、受験日程が許す範囲の中で、合格可能性を高めるためにより多くの大学を受験するので、1人当たりの受験校数は増加傾向にあります。ただ、実際に受験した人の実質倍率はかなり下がり、2024年度は平均で13.7倍となっています。

入試区分としては、学力試験で合格を目指す一般選抜と、学校推薦型・総合型選抜などがあります。医学部でも他学部と同様に、多くの大学で推薦型選抜を取り入れています。私立大学医学部における推薦型選抜の募集割合は約2割と、他学部に比べて比率は高くありません。とはいえ、一般選抜より倍率が低く、試験科目も少ない大学もあるため、出願の条件を満たすなら受験機会を増やすためにも利用価値は高いといえます。

基本は4科目だが、2・3科目の大学も 科目の配点比率、合格ラインにも要注意

一般選抜の受験科目は英語・数学・理科2科目の計4科目が基本です。中には3科目または2科目で受験できる大学もあります。例えば、東海大学は英語・数学に加えて理科が1科目です。金沢医科大学の後期選抜は英語と数学のみで、理科はありません。昭和大学は数学の代わりに国語で受験することができます。また、帝京大学、東海大学などは数学の試験に数Ⅲを課さないなど、出題範囲の違いも見られます。

各科目の配点は大学ごとに異なります。例えば、順天堂大学の一般選抜A方式は英語の配点が200点に対し、数学と理科2科目は100点ずつなので、英語が苦手な人には厳しい入試といえます。また、英語と数学の配点を理科より高くするなど、大学によって実にさまざまです。このように受験科目や出題範囲の違い、配点の違いなども受験校選定のポイントになってきます。

合格ラインにも注意が必要です。偏差値が高い大学ほど問題が難しいように思いがちですが、そうではない大学でも問題が難しいことは珍しくありません。過去問を解いて半分もできなかったとしても、その大学が自分にとって相性が悪いとは限りません。大学によっては5割を取れば合格ラインに入るところもあるからです。そこを知らないと、可能性があ

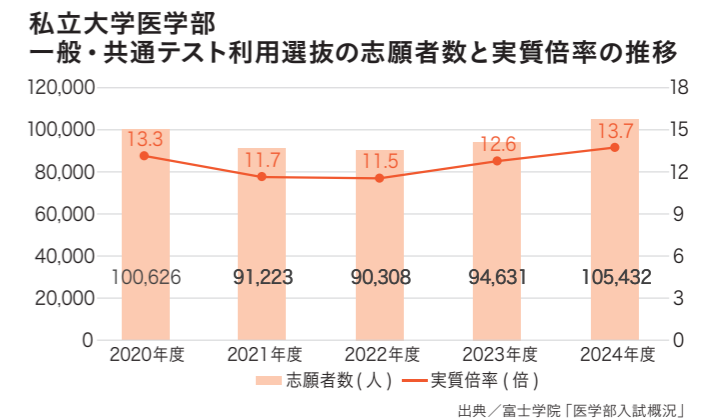
る大学を切り捨ててしまうことになりかねません。

医学部に合格するには面接試験もクリアしなくてはなりません。医学部では国公立大学も私立大学も全ての大学で面接を課しています。特に、近年は医療現場の実態を踏まえてか、医師としての資質を問う人物評価が重視される傾向にあります。実際、学力試験では合格点を取ったのに、面接で不合格になる受験生は一定数います。また、医師としての適性や資質を測るため、小論文を課す大学もあります。これも課題文を与えて要約や見解を書かせるもの、テーマを与えて考察させるもの、表やグラフの読み取りから分析させるものなど、形式や内容は大学によって異なります。

このように私立大学医学部は、入試方式も受験科目も配点比率も合格ラインも大学ごとに異なります。言い換えれば、大学ごとの特徴をつかんで自分に合った大学を選び、それに合わせた対策をしっかりとることができれば、合格可能性は高まるといえます。

「医師になるために勉強する！」 その覚悟が決まれば学力はついてくる

今の段階で医学部受験を決めてないにしても選択肢の一つとしてあるなら、その時々学校の勉強をきちんと積み上げておくことが大切です。基礎がしっかりできていれば、いつでも医学部受験にシフトできるからです。授業を受ける姿勢も大切です。受け身で聞いているだけや、ノートを取ることを目的に



らないように、授業へ積極的な姿勢で挑み、その時間に理解を深めていこうとする思考が重要です。ノートも後から復習に役立つ取り方の工夫をすると、自分だけのオリジナルテキストになっていきます。小・中学生なら、それぞれの教科の基礎、原理・原則、考え方をきちんと理解して、上の学年に進級していくことが大切です。医師は一生、勉強し続けなければならない職業です。勉強し続ける姿勢が持てなければ、たとえ医学部に進学できたとしても、医学部の勉強にも医師として必要な勉強にもついていけないでしょう。

自分から積極的に学習する姿勢を身に付けるためにも、「将来、医者になりたい」という気持ちを早めに固めるに越したことはありません。「〇〇大学合格のため」の受験勉強では面白くありません。「将来の職業に向けて今頑張るのだ」となれば、努力も違ってきます。大学の医学部ではオープンキャンパスなども開催されています。気持ちを固める一つのきっかけとして出掛けてみるといいでしょう。

医学部合格者の共通点とは

「感謝の気持ちを持つ人」は強い

伸びる生徒には感謝の気持ちが強いことを感じます。頑張ったのに成績が思うように伸びなかった時、そういう生徒は「どこがいけなかったのか」と自分に向き合います。逆に感謝の気持ちがなく、何に対しても文句を言う人は「先生の教え方が悪い」「問題が良くない」などと、人のせいになります。そこでイライラが増えて学習習慣が崩れてしまうわけです。



私はよく生徒たちに「感謝できることを100個書きなさい」と言います。書くことで自分を振り返ると、いかに自分が恵まれているかに気づきます。感謝が増えると1回1回の授業や先生との出合いを大切にできるようになります。受験生活で思うようにいかないことはよくあります。そんな時は感謝の気持ちを持つことです。それが自分を守ります。

合格のその先へ。「教え育む」教育で 人間力を鍛えて未来の良医を育てる

高い合格実績を誇り、毎年、在籍者の2人に1人以上を医学部医学科に送り出す富士学院は、全国10校舎で生徒の人的成長を促す教育を展開しています。医学部進学の見据える指導について、村田慎一学院長に伺いました。

学力別の少人数教育を徹底 個別サポートで高い合格率

医学部医学科に圧倒的な合格力を誇る富士学院は、2024年度入試でも堅調でした。医学部医学科専願者622名のうち、実数で363名が合格し、合格率は58.4%に上ります。国公立専願者に限ると合格率は82.3%に達します。

大学入試全般では、少子化の影響から共通テストの受験者数は減少しています。一方で医学部の受験者は増加傾向にあり、特に私大医学部の2024年度の受験者数は前年度より約1万人増加しました。一人当たりの受験校数が増え、激戦が続いていることが分かります。

「私立大は日程さえ重複しなければ何校でも受験できるので、一人で9～10校受ける人も珍しくあり

ません。ただし、国公立・私立とも大学によって出題の傾向が異なるため、それぞれへの対策が必要です」と村田先生。富士学院が右肩上がり合格実績を伸ばしているのも、徹底した最新の入試情報をリサーチした上で、一人ひとりの生徒に個別に対応して可能性を広げ、講師・職員がチームになって、きめ細かくサポートしているからだと言います。

全国に10校舎を直営する富士学院は、高卒生を対象とした国公立医学部コース、私立医学部コース、国公立・私立併願コースの3コースに加え、現役生も受講できる個人指導があります。国公立医学部コースだけは選抜試験を実施していますが、それ以外のコースは合格を目指して真面目に頑張るという生徒を全て受け入れています。

柱となる日々の授業は学力別で8名以内の少人数制。講師は生徒の状況を確認しながら授業を進め、1週間に一度の「週テスト」で理解度を確認します。各種テストの結果でそれぞれの生徒に合わせたフォローアップを行うのはもちろん、クラスの理解度によってはもう一度同じ単元の内容を変えて作業を行うこともあります。村田先生は「週単位で着実に知識を身に付けていく効果は大きいです。その時点での適切な対策を一人ひとりに提示しています」と自信を見せます。

医師になる覚悟を問い続け 面接指導は1年がかりで

医学部入試でより重視されるようになった面接指導にも力を入れています。なぜ全ての大学で面接試



医学部現役合格を目指すサポートの一環として、全国各地の約100校の高校と連携して毎年実施される校内医学部入試セミナー

験を行うのか。医師になる覚悟が問われているからです。医学部受験は医師という職業が前提になっている就職試験でもあるからこそ、大学側は受験生の本気度を見たいと考えています。

面接試験で不合格になる人も少なくないため、指導には1年がかりで取り組んでいきます。志望動機だけでなく、日常的に社会に関心を持って自分の考えをきちんと発言できなければ、今の医学部入試には太刀打ちできません。入学時から専用の面接ノートを作って自分の意見をまとめさせ、面接練習を何度も繰り返します。こうした面接対策も富士学院の強みといえます。

受験に向けて奮闘する生徒を、医学部生や医師になった卒業生で組織する「富士OB会」も支えています。顧問を務める順天堂大学特任教授の天野篤先生は、富士学院の全校舎で「自立講座」を実施。医師はどんな仕事をするのか、医学部で何を学ぶのかなど、生徒のモチベーションアップにつながる講演会を開催しています。

さらに、医学部合格サポートの一環として、高校や大学との連携も活発に行っています。入試の概要から面接や小論文の重要性、合格に直結する出願先の選定などを分かりやすく解説する「医学部入試セミナー」は、全国各地から依頼があった100校近



くの高校で毎年実施しています。大学でも依頼のあった大学のオープンキャンパスなどの機会を活用して入試問題の解説を行う「医学部入試対策講座」を開催し、ともに高評を得ています。

本気で医学部を目指す人を 本気で育む集団であり続ける

富士学院の理念である「教え育む」教育は、ただ勉強を教えて成績を上げるだけではなく、生徒の真の自覚・自立を促し、成長へと導くことを重視してきました。今後も揺るがない根幹として、村田先生は「教え育むことの精度を上げ続けたい。本気で医学部を目指す生徒を本気で育む集団として、より良いものは積極的に取り入れていきます。進学した大学で『富士学院の卒業生は違う』と評価してもらえるように、大学にも高校の先生方にも喜んでもらえる予備校であるために、教え育む教育の実践にこれからも誠実に取り組んでいきます」と力を込めます。

最後に、医学部を目指す受験生にメッセージを送ってくれました。「人の命と向き合って、止まりかけた人生を直接的に未来につながる職業は医師しかないと思います。さまざまな職業がある中で、医師になりたいと思うのは素晴らしいこと。医学部受験は難しいと言われるますが、将来医師となって命という領域に向き合うには学力は必要ですし、人を救いたいという根源的な慈愛の精神も不可欠です。日々の勉強、そして人としての成長を両輪に、受験に向かって頑張ってください」

各科目の講師が連携 チーム指導で合格を勝ち取る

富士学院の最大の特徴は、チーム制による連携指導です。全ての科目の講師と校舎長、教務担当がチームを作り、一人ひとりの生徒の現状や課題を共有しています。受験本番では、苦手科目があれば、総合点で勝ち切れません。科目ごとに課題の量を調整するなど、チームで連携して指導することで合格の可能性を高めます。チーム会議では合格までの具体的な道筋を全員で確認し、最後は生徒の決意表明で締めくくります。



各科目の講師陣と担任、校舎長などがチームとして生徒情報を共有し連携しています

医学部受験
富士学院
学院長
村田 慎一 先生

